

2017年度 自己点検・評価【理工学部】

C票

<目標、行動計画>進捗確認シート

提出日:2018年2月22日

2021年度に向けた教育研究目標

責任者	理工学部長	作成部局	理工学部
-----	-------	------	------

【A票:教育研究目標1】
(タイトル) 幅広い視野と柔軟な思考力をもち、自然科学・科学技術の知識を生かして社会貢献できる人材の育成。
(狙い内容) 自然科学・科学技術の幅広い分野にわたって基礎知識と能力を修得し、多様な教養教育により人格形成に努めるとともに広い視野を養い、社会のいろいろな分野で活躍することができる人材を育成する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)
理工学部の学生が、在学中から積極的にキャンパス外で活動し、社会・企業における実践的な演習を通じて実社会を学び、様々な分野で社会から求められるような人材となって卒業してゆくようにする。

2. 達成度評価				
<table border="1"> <tr> <td>評価指標</td> <td>実社会を学び、幅広い視野と柔軟な思考力を育むハンズオンラーニングプログラムへの参加学生数</td> <td>評価尺度</td> <td>A: 250名以上 B: 200~250名 C: 150~200名 D: 150名未満</td> </tr> </table>	評価指標	実社会を学び、幅広い視野と柔軟な思考力を育むハンズオンラーニングプログラムへの参加学生数	評価尺度	A: 250名以上 B: 200~250名 C: 150~200名 D: 150名未満
評価指標	実社会を学び、幅広い視野と柔軟な思考力を育むハンズオンラーニングプログラムへの参加学生数	評価尺度	A: 250名以上 B: 200~250名 C: 150~200名 D: 150名未満	

3. 年度毎の目標値							
	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点	D 122名	C 180名	C	B	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	C	C			
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	122名	173名	見込み 150名			

【2017年度の進捗状況について】
参加者数の減少は、主として2015年度の改組に伴うカリキュラム改編によるものである(「地学実験」の先修条件が厳しく設定したこと、「地球環境実験」の履修指導方法の変更等)。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか？

→ はい ・ いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 全体として評価できます。
- ・ なお、行動計画①のハンズオンラーニングプログラム関連で企業等と連携した新設科目数及び②のインターンシップ受け入れ企業数については今後増加させていくことが望まれます。(B)
- ・ 目標に向けて今後の進捗が期待されます。(D)
- ・ ハンズオンラーニングプログラムの取り組みの進展が期待されます。(E)
- ・ カリキュラム改編の影響により一時的にハンズオン・ラーニングプログラムの参加学生数が減少しているようですが、行動計画にある、企業と連携したPBL型演習科目やインターンシップによる実習科目を充実させて、更なる取り組みの活性化に期待しています。(F)
- ・ 適切に自己評価が行われています。今後の進展が期待されます。(G)
- ・ 行動計画①、②とも達成状況は景気などの環境に大きく影響されるため、目標の達成は厳しいように思われますが、今後に期待します。(H)

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

実践的・体験的教育による実社会の課題解決のための応用力養成。

(狙い内容)

実験科目、演習科目、卒業研究を重視し、これらの科目を通して、自然科学・科学技術の最新の研究に携わる機会を持ち、自然科学の真理を探究していくことの楽しさと感動を身近に体験するとともに、自然科学の知識や能力を社会に活かしていくための応用的能力を養う。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

理工学部学生がキャンパス内での学びのみで卒業するのではなく、実社会との関わりの中で新たな知識を獲得し、問題を発見し、学んだ成果を発信することができるようにする。

2. 達成度評価

評価指標	実社会の課題解決のための応用力が養成できたかの指標として卒業時にアンケート調査を実施し、6年後には学習満足度が80%以上になるようにする。(2015年度:未実施)	評価尺度	A: 80%以上 B: 60%~80% C: 40%~60% D: 40%未満
-------------	---	-------------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点		未実施	D 卒業時アンケート調査を実施する。	C	B	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	B	目標	B			
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	未実施	68%		60~70%			

【2017年度の進捗状況について】

今年度も2016年度と同様のアンケートを実施する予定である。アンケートの集計結果については、執行部で共有し、課題の認識、調査項目の見直しなどについて意見交換を行っている。
フィールドワークへの参加学生数が2016年度に比べて減少しているのは、主として2015年度の改組に伴うカリキュラム改編(先修条件の変更等)によるものであり、今後は科目内容の充実と各学科の履修指導によってこれを改善する計画である。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → はい いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 順調に進捗しており、評価できます。(A)
- ・ ほぼ順調に進展していると思いますが、フィールドワークへの参加学生数の減少が気になるところです。(B)
- ・ 目標に向けて今後の進捗が期待されます。(D)
- ・ 行動計画①②の進展が期待されます。(E)
- ・ 行動計画①のフィールドワーク参加学生数が、昨年度に比べて大幅に減少する見込みになっていますが、どのような要因からでしょうか。要因を分析して今後の施策に繋げることを期待しています。(F)
- ・ 適切に自己評価が行われています。(G)
- ・ 卒業時のアンケートによる学習満足度評価は大いに評価可能であり、その向上が今後も期待されます。(H)
- ・ 卒業時のアンケート結果を活用して、さらに進展することが期待されます。なお、なかなか容易ではありませんが、今後は満足度に関するアンケートにととまらず、学生が課題解決のための応用力を身につけたかどうかを確認する新たな指標の開発が期待されます。(I)

【A票:教育研究目標3】

(タイトル)

自然科学・科学技術の知識を生かして、国際的に活躍できる人材の育成。

(狙い内容)

英語の能力は、自然科学・科学技術を学ぶ上で必須の要件であり、研究の成果を世界に向けて発信していくためにも不可欠である。英語に強い理系の人材育成を目指し、英語教育に力を入れる。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

理系におけるESP(English for Specific Purpose)教育を行い、学生が各自の専門分野について英語で表現することができ、他国の同じ専門分野の学生とのコミュニケーションをとれることを目指す。このコミュニケーションとは、通信を通じてやり取りをする以外に、国際学会での発表、情報の交換会、また専門雑誌を通じて論文を記載するという専門分野におけるあらゆる相互行為を示す。

2. 達成度評価

評価指標	「科学技術英語」・「千刈集中英語実習」、その他の関連科目・研修等に参加した学生らにアンケートを取り、成果・満足度(項目「積極的に取り組んだか」「授業目的に即した成果が得られたか」「授業に満足したか」等)を測る。	評価尺度	A: 80%以上 B: 60%~80% C: 40%~60% D: 40%未満(または未実施)
-------------	---	-------------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		D 未実施	C 40%	C 50%	B	B	B	A
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	D	B	A				
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	未実施	70%	80%				

【2017年度の進捗状況について】

夏休みに行われる「科学技術英語実習」(千刈キャンプ英語集中実習)が2015年度よりIEFLの雇用人数が増えたため、オンキャンパスという形で拡張した実習を行ってきたが、新学科増設に伴いその完成年度まではこのオンキャンパス実習に参加できない学生が発生することになったため、2017年度はキャンプ場での実習だけを行った。また3年次用の学期中の「科学技術英語科目」の考慮も必要ではないかと再考し、これの進捗状況もここに合わせて報告することは適切な変更であると判断した。評価指標にもその旨記入してあったが、当科目の評価がなされてなかったと結論した。キャンプ場での実習の後のアンケートでは、学生の満足度は平均して80%となっている。以上の考慮対象の変更は、下記の「行動計画 1」の進捗評価にも反映されている。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → はい いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 順調に進捗しており、評価できます。(A)
- ・ 英語教育への取組み(行動計画①及び②)は、順調に進展しており評価できます。(B)
- ・ 行動計画1 は今年度達成見込みであるようです。教育研究目標内容に比して、T O E I C の得点目標(500点)および達成比率(所属学生の20%)について次年度以降の再考が期待されます。(C)
- ・ 目標に向けて順調に進捗しており、今後の進展が期待されます。(D)
- ・ 英語教育の取組みは順調に進展しています。(E)
- ・ 英語教育に関する取組みが進められた結果、英語実習への参加学生が拡大し、学生の能力が向上している様子が窺えます。(F)
- ・ 順調に進展しています。(G)
- ・ 行動計画②のような教育の取組みは、博士前期課程に導入している大学は多いですが、学部生向けに導入しているのは比較的珍しく評価に値すると考えられます。順調な進捗を期待します。(H)
- ・ 行動計画が順調に進んでいます。英語教育の質向上によって、新たに設定された目標値を今後も達成していくことが期待されます。(I)